

つてゐると言へる。哲學も又、自然から神的なものを剝脱したといへるが、又逆に、自然は神的なものを剝脱されるにふさはしかつた。即ち、自然は和親的な自然であつたのである。それ故に、ギリシヤ人が人間の感情を託してそれを表はし得たのであり、ミケネ時代やオリエントからの超人的な神を、ギリシヤに於ては、人間性に於て捉へ得たのであつた。

更に日常生活——ポリスの生活が自然との接近を、より密接にした事が考へられる。ポリスは都市ではあるが、各種の人が住み、又ソクラテス・プラトン・アリストファネス等に於て見られる様に、戸外の生活が多く、その意味でも自然との接觸は多かつた。又、民主主義生活は、市民間に大きな差をつけず、皆、自然と共に生活してゐた。これらが、古代ギリシヤに於ては、ギリシヤの自然が生活の中に入り、更にギリシヤ精神・文化と結合した所以であらう。(文責在記者)

眞宗同學會大會紀要

第八回眞宗同學會大會は、昭和二十七年十一月二十一日、大谷派本願寺別邸、涉成園園風亭に於て行はれた。以下は當日に於ける會員研究發表の概要である。

勝劣難易の試解について

藤原幸章

(一)、問題の所在) 他力淨土教の基盤は念佛往生ということ

であるにも拘らず、それは必ずしも常に純粹にのみうけとられては來なかつた。このことは單に過去に於ける歴史的な出來事であつたというに止らず、現に我々の間にも常に繰り返されてゐる悲しむべき事實である。私は今「阿彌陀佛の本願は何故に諸行を廢してただ念佛のみを選択したのであるか」という選擇集の中心課題に對して、元祖が自ら本願章に自問自答の形式を以て展開せられた勝劣難易の試解を手がかりとして、念佛信仰にからまる本質的な諸問題に答える一つの通路を見付けてゆきたいと思う。

(一)、問題の展開)

元祖の解釋によれば如來の念佛選擇には二面の意味がある。第一には念佛は萬徳の所歸であつて内は一切の諸行を攝めてゐるから、個々の諸行に對してそれは勝れてゐる。(勝劣) 第二に難行難修の諸善萬徳に對して念佛は特に易行易修の徳をもつ。(難易) この故に佛は「被_レ催_二平等慈悲_一普爲_レ攝_二於一切_一……唯以_二稱名念佛一行_一爲_二其本願_一也」と。

この解答は内容が多含であるに拘らずその表現が餘りにも簡明であるがため、稍々もすればただ機械的にのみうけとられて、元祖の眞意が失はれるのみか、ここから念佛信仰の最も危険な形成すら引き出される要因となる。即ち第一にそれは如來選擇の行たる念佛を單なる人間の功利や便宜に於いてのみうけとらしめ、その結果多念能稱の功を募る修善的な人間行に顛落せしめることとなる。念佛の影にかくれた安易な便宜的な信仰形態や、人間の當爲の世界に引き降された念佛が、所謂別時方便説の外の何物でもないことはいうまでもない所である。第二に念佛は萬徳の所歸なるが故に勝義をもつとするならば勝の勝たる

所以は全く内に包まれた萬徳にあるのであつて、念佛往生といつて實は諸行往生と異なるものではない。寧ろ内に萬徳を包むが故にそれだけ積極的な諸行往生の肯定となる。(行觀の私記・智圓の私聚鈔參照) 従つてそれは元祖の確立した廢立爲正の根本的立場をすら覆す最も恐るべき危険を孕むものといはねばならない。第三に萬徳所歸の表現は又念佛を極度に神祕化しまじカルな咒術的信仰に墮せしめ、低俗なアニミズムにすら顛落せしめる危険を伴うこととなる。第四に念佛が單に易行易修であるというならば、佛は六字よりも一字の稱名をこそ選擇すべき筈であり、(蕘惠の私集鈔參照) この意味に於いて一字の密咒の方がはるかに易行といふべきである。かくては彌陀超世の願意も否定せられ、六字名號そのものも崩れなくてはならないこととなる。又更に易行易修ということとは屢々信仰生活の眞剣さを失はしめる危険な陷穽とさえなり易いことも忘れられてはならない。

かくして元祖のこの解答はその表現の危険性の故に期せずして後世の淨土教徒を躓かしめる結果を招いたのであつたが、元來念佛選擇ということが純粹に如來の仕事である以上、元祖の如きすぐれた宗教的天才を以てしてもなお且つ完全にはこれを計り盡し表し盡し得なかつたのであろう。さればここにいう「試解」とは元祖の單なる習作的な試みの説であるか或は決定説であるか(行觀の私記參照) という如き表面的な問題ではなく、本來的に人間の問い得ざる問を敢てせんとする傲慢を自覺した元祖自身の謙虛な態度の表現であるとみるべきである。

(蕘惠の私集鈔・惠空の叢林記參照)ここに至れば如來選擇の聖

意は念佛が勝易の二徳をもつが故にと答えてもいいであらうし、逆に如來自身の行であるからと答えてもいいであらう。(念佛付屬章參照)若し強いていえば念佛が正定業であるとは、もともと如來の仕事であつて我々の關知すべき出來事でないというより外にはないのであつて、これこそ選擇本願念佛の本質的構造であるといはねばならない。

ここに於いてか宗祖はこの念佛を以て如來の往相廻向の大道とつけたり、その根據を第十七願に求めて「諸佛稱名之願淨土眞實之行選擇本願之行」と標げ、「稱無碍光如來名」と解釋しつつ終にはこれを「眞如一實功德寶海」と如來の世界に歸して、それなればこそ大道であると定義しておられる。思うに宗祖のこの方法は元祖の勝劣難易の解釋が兎もすればその本來の意圖に反して、顛落の危険を孕むものであることを反省し、これをその本然の相に於いて如來廻向の大道としてつけとつたのであつて、それは元祖の眞意を明確に相承せるものであるといわねばならない。

(三、問題の歸結) かくて念佛が往相廻向の大道として人間的な諸の行と飽くまでその質を異にした「大悲の願より出づる」如來の行であるということが明確にせられるとき、このとき初めて念佛信仰にからまる諸の迷妄は一擧にして拂われるものといわねばならない。私がここにとりあげた元祖の勝劣難易の解釋も、要するに念佛が如來廻向の大道であるという淨土宗の正行の本質を明らかにしようとした極めて眞剣な企てであつたという外にはなく、このことを最も明確に磨き出した人こそ親鸞聖人であつたのである。

傳教大師の大乗戒思想に於ける

「圓ノ義」に就いて

武田賢壽

傳教大師は平安の新佛教樹立の爲に、南都の舊佛教に對して二つの大論諍、則ち「三一權實」の論諍と、「大戒小戒」の論諍とを取行せられたのであるが、此の中前者は既に印度及び支那に於て論議せられた問題であり、從つて大師の「大戒小戒」の論諍こそ三國佛教史上に於ける大師の劃期的地位を成さしむるものと言つても良いであらう。而して當時我が國に行はれてゐた戒律は、鑑眞傳來の南山律を基調とする、分通大乘戒に他ならぬのであるが、此の南都現行の分通大乘戒に對して傳教大師は、「顯戒論」(明據二十)に於て、

「夫十重戒雖先傳授、但有其名、未傳其義、何以得、未傳其義、乎然未解圓義、故共小儀、故」と述べて眞向から反對して居られるのである。

思ふに南都に行はれてゐた分通大乘戒とは、大乘戒としての三聚淨戒に於て其の攝律儀戒として小乗の二百五十戒を用ふる戒法であり、それは大小二戒の折衷を目的とする、「瑜伽論」の戒律思想に外ならぬのである。これに對して、南岳慧思禪師は攝律儀戒として「梵網經」の十重四十八輕戒のみを用ふる處の、純大乘戒の思想を發達せしめられ、それを承けられたのが天台大師であるが、天台大師は畢竟じては自己の開會思想に基

いて、二百五十戒も「法華經」の精神で受ける時は實相の妙戒なりと、開會せしめて居られるのである。此れに反して傳教大師は、小乗戒に對して眞向から純大乘戒を推し立てて天台傳統の開會思想の規範を破つて獨自の戒律思想を樹立せられるに到つたのである。斯くの如く大陸に於ては思想のみに留つた純大乘戒の思想が、我が國に於て傳教大師に依つて始めて具體的に實踐に移されるに到つた事は吾々の最も注意すべき問題ではなからうか。

傳教大師の戒律思想に及ぼした最も重要な思想的影響としては、(一)出家以後入山迄に於ける行表、及び行表を通じて得た道璿の影響、(二)入山以後に於ける天台の諸典籍の影響、(三)入唐求法に於ける道濠の影響、(四)入唐求法及び歸國後に於ける密教の影響、の四つを擧げることが出来るのであるが、今は此の他に特に傳教大師に對する聖德太子の影響に就いて述べたいと思ふ次第である。

聖德太子と傳教大師との關係を語るに當り先づ考ふべきは、聖德太子の慧思再誕説であるが、今は紙數の都合で特に、「法華經」と鎮護國家に就いて述ぶることとする。

傳教大師の大乗戒建立の一つの重要な目的は、奈良の朝廷を衰亡に導ける南都佛教の惡弊から脱せんと願ひ給ひし、桓武天皇の御願に應へ奉ることに存し、從つて傳教大師にとつては、天台法華宗の建立と、鎮護國家とは離すべからざる問題であつたのである。此れ恰も聖德太子が佛法の興隆に依つて國家を興隆せしめんと願ひ給ひし事と全く歸を一にするものであり、此處に太子と傳教との、法華經觀が自から融合すべき根本